

Friendship,Self-and Friend-image among Contemporary Adolescents

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3846

現代青年の友人関係と自己像・親友像についての発達的研究

岡田 努

Friendship, Self and Friend-image among Contemporary Adolescents Tsutomu OKADA

問題と目的

(1) 青年期の友人関係 青年期は友人との親密な関わりを通して、自己の再発見や社会化などの発達が促進されると考えられてきている。その友人関係は、親密で内面を開示しあい、人格的共鳴や同一視をもたらすような関係(以後「内面的友人関係」と称する)を特徴とし、これによって青年は新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進されるとされてきた(西平, 1973, 1990 など)。しかし、1980年代半ば以降、このような内面的友人関係を避け、互いに傷つけ合わないよう、表面的に円滑な関係を志向する傾向(以後「現代的友人関係」と記す)が指摘されている(東京都生活文化局, 1985; 千石, 1991; 栗原, 1996 など)。岡田(1995)は、質問紙調査から、現代青年の友人関係の特徴として、表面的で快活な関係を求める傾向、内面的関係を避ける傾向、相手に気を使う傾向に分類し、それぞれの特徴を強く持つ青年群(群れ関係群、関係回避群、気遣い関係群)を見出した。また岡田(2007)は、大学生に対する調査で、内面的関係を避ける青年は境界人格障害傾向が高く、また傷つけ合うことを避け表面的に円滑な友人関係を取る青年には、病的な自己愛の問題が見出されるなど、現代的友人関係と不適応との関連が指摘されている。

青年期の友人関係が社会化にもたらす機能として、「モデル機能」「安定化機能」「社会的スキルの獲得機能」があげられている(松井, 1990)。岡田(1987)は、中学生期から高校生期では親友像と理想自己像の相関関係が高く、大学生期にはこれに代わって現実自己像と理想自己像の相関関係が高くなることを見出した。また自尊感情(自己評価)と現実-理想自己像間の差異(Dスコア)との相関も大学生期にかけて次第に強くなることを見出された。以上のことから、中学生期から高校生期にかけて親友像が理想自己像に取り入れられ、これが大学生期において自尊感情の基準として機能するようになると岡田(1987)では考えられていた。しかし、岡田(1987)では各年代別個の相関関係に基づいた考察が行われており、年代間での自己像、親友像や自尊感情を共通の空間上での比較がなされていないこと、データの大きさが各学校段階で50人台と小さいことなどの問題点がある。また、この研究では自己および親友像の評定に一般的な性格特徴に関する形容詞が用いられ、自己の様々な側面についての検討がなされていない。しかしながら以下(2)に述べるよう

に、個人が意識を向けやすい自己の側面には発達的な相違が想定されるため、そうした自己の側面の違いを考慮に入れた研究が必要と考えられる。

(2) 青年期の自己の発達 一方、自己把握や自己理解の発達に関しては、次のようなことが知られている。Damon & Hart(1982)は、幼児期には名前、身体など物理的側面を中心とした自己把握(physical self)、児童期には、行動や能力など活動性を中心とした自己把握(active self)、青年期の初期には対人関係など社会的側面による自己把握(social self)、青年期の後半には個人の感情、性格特性、信念など心理的側面による自己把握(psychological self)と、発達に伴って次第に抽象的で不可視的な属性による自己理解へと変化すると述べている。また自己理解の発達についても、幼児期・児童期においては身体的特徴などを中心とした可視的・表層的属性に対する自己理解が中心であり、青年期以降には形式的操作等の発達に伴って、心理的理解など不可視的な属性への自己理解へと移行すると考えられている(Rosenberg,1986;佐久間・遠藤・無藤,2000)。このように、発達のそれぞれの段階によって中心的役割を果たす自己の側面は異なっており、自尊感情を規定する現実・理想自己の側面についても同様に発達的な相違があることが考えられる。

先に述べたように内面的友人関係が青年の成熟を促進させる要因となるならば、現代的友人関係を取る青年は、適応の問題と同時に、自己の発達においても未熟な特徴を示すと考えられる。すなわち、現代的友人関係を取る青年は内面的友人関係を取る青年に比べて、青年期以降において重視される「心理的」、「社会的側面」よりも、それ以前の段階において重視される表層的側面(活動、身体的側面)における現実自己像－理想自己像の差によって自尊感情が規定されることが考えられる。この点に関して、岡田(2007)は、大学生に対する調査で、現代的友人関係を取る青年において、身体的側面や活動的側面など発達的に低い段階で重視されやすい自己の側面について、現実－理想自己像間の差異と自尊感情との相関関係を見出した。しかし、岡田(2007)は大学生のみを対象とした調査であるため、発達的な相違については検証されていない。

本研究では、以上の問題点に基づいて、以下の仮説のもと、中学・高校・大学生における友人関係と自己概念の関連について検討し、あわせて現代的友人関係を取る青年の自己意識および行動の特徴について探索的に検討するものである。

1) 現代的友人関係を取る青年はそうでない青年に比べ、適応に問題が見られるだろう。すなわち岡田(2007)と同様に、対人関係から退却する傾向のある青年には全般的な不適応が見られ、一方、友人と傷つけ合うことの回避や快活的関係を中心とした群では、自尊感情の水準は低くないものの、病理的な自己愛の問題が見られるだろう。またこうした青年は対人関係については円滑に取ることが出来るため、社会的スキルの水準は高いだろう。

2) 現代的友人関係を取る青年は、青年期前期において、身体的側面や活動的側面など年少者にとって中心的である自己の側面において親友像と理想自己像の類似が見られ、青年

期後期にはそうした側面での現実・理想自己像間での差異によって自尊感情が規定されるようになるだろう。

3) 内面的関係を取る青年は、青年期以降に中心的となる心理的および社会的側面において2)の過程が見られるだろう。

方法

下記の方法による質問紙調査を行った。

調査協力者 中学生 東京都下および新潟市の公立中学校1, 2年生 有効回答数 238名
(男子121名, 女子117名 年齢 12~15歳 平均 13.6歳) 実施時期 1999年3月
高校生 東京近郊の公立高校 292名(男子145名, 女子147名 年齢 14~16歳 平均
15.7歳) 実施時期 1999年12月

大学生 東京近郊4年制私立大学1~5年生(本人記述) 246名(男子90名, 女子153
名 不明3名, 年齢 18~24歳 平均年齢18.8歳) 実施時期 1999年5月~7月

尺度項目

1) 側面別自他概念 岡田(2002b)において作成された自己の諸側面に関する項目である。本項目は、山本・松井・山成(1982)が見出した自己認知の諸側面から、調査項目として施行可能な領域として、社交、スポーツ能力、知性、やさしさ、容貌、趣味や特技、まじめさの各領域の項目について中学・高校・大学生の回答に基づいて因子分析を行ったもので、Damon & Hart(1982)が客体的自己の側面として記述したものに対応して、「心理的側面」(4項目)、「社会的側面」(6項目)、「身体的側面」(4項目)、「行為的側面」(6項目)の各因子が得られている(本研究では岡田(2007)同様、項目の内容から「活動的側面」と称する)。「心理的側面」は主に性格的なまじめさ、「社会的側面」は社交性、「身体的側面」は外見的な魅力、「活動的側面」はスポーツなどの得技があること、などの内容の項目から成っている。それぞれの項目について現実の自分、なりたいと思う自分および、同性のもっとも親しい親友に対する評定を求めた(以下「現実自己像」「理想自己像」「親友像」と記す)。

2) 現代青年の友人関係に関する尺度 岡田(1999a)で作成された「現代青年に特有な友人関係の取り方に関する尺度項目」(以下「友人関係尺度」と記す)を用いた。本尺度は、内面的友人関係を避け、互いの内面に踏み込まないような関わり方を示す「自己閉鎖」、友人から自分が否定的に評価されないよう気をつかう関わり方を示す「自己防衛」、友人を不快にさせないよう気をつかう関わり方を示す「友だちへのやさしさ」、楽しく円滑な関係を取る「群れ」の下位尺度から成る計42項目である。本研究では岡田(2007)と同様、岡田(1999a)において.4以上の負荷量を持つ35項目のみを使用し、また「群れ」下位尺度については「快活的関係」と下位尺度名を改めた(具体的な項目は岡田(2007)を参照のこと)。

3) 自尊感情尺度 Rosenberg(1965)が作成し山本他(1982)が邦訳し信頼性、妥当性を検証した尺度で、個人の全体的な自尊感情の水準を測るものである。10項目から成り岡田(1987)において尺度の一次元性が確認されている^{註1}。

4) 社会的スキル 菊池(1988)が作成した社会的スキルに関する尺度(Kiss-18)18項目。

以下の項目については、実施可能な調査の分量の関係から大学生のみに実施された。

5) 自己愛人格目録 Raskin & Hall(1979)が作成した Narcissistic Personality Inventory を小塩(1998)が邦訳の上、信頼性・因子的妥当性を確認した尺度である。岡田(2007)と同様、小塩(1998)の因子分析において因子負荷量.4以上であった33項目を用いた。強い自己肯定を表す「優越感・有能感」、他者の注目の的になったり権力志向などの内容からなる「注目・賞賛欲求」、意見や決断力をあらわす「自己主張性」の下位尺度から成る。

「自己主張性」は能動的で積極的な自己愛の側面を測っているのに対し、「注目・賞賛欲求」は自意識過剰、社会的不安などとの関連が指摘されている(小塩,1998)。以下NPIと記す。

6) 病理的自己愛に関する尺度 Lapan & Patton(1986)にもとづき、岡田(1999a)が評定尺度形式の項目として再構成し信頼性および併存的妥当性を確認したものである。岡田(1999a)では、他者からどう思われるかを過度に気にする「他者評価過敏」の下位尺度(8項目)についてのみ信頼性が得られていたため、本研究ではこの下位尺度のみを用いた。

7) ボーダーライン・スケール 個人の境界性人格障害傾向を測る尺度項目である。Conte,Plutchik,Karasu,& Jerrett(1980)が作成した Borderline Scale を町沢(1989)が邦訳の上、信頼性を確認した。本研究では岡田(2007)と同様、患者群との判別に関わる偏相関係数が高いことから妥当性が認められた16項目を用いた。以下BSIと記す。

8) 自己意識尺度 性格特性としての自己への意識の向きやすさの程度を測る尺度で、Fenigstein,Scheir,Buss(1975)に基づき菅原(1984)が作成したもの。他者から見られた自分に意識が向きやすさの度合いである「公的自己意識」(11項目)と、自己の内面に対する意識の向きやすさを示す「私的自己意識」(10項目)の下位尺度から成る。

9)現代青年項目 岡田(1999b)で作成された現代青年の特質に関する項目(「現代青年項目」)29項目。積極的に自分から進んで行動し、自分の意見をはっきり示すなどの「積極性」、物事を深刻に考えず面白いことだけに関わろうとする「軽薄性」、親に精神的に依存した状態である「親依存性」の下位尺度から成る。

以上すべての尺度項目は「全くあてはまらない(1点)、あてはまらない(2点)あてはまる(3点)とてもあてはまる(4点)」の4件法により実施された。

結果

1 尺度の分析

自尊感情尺度について次元性を再確認するために、中・高・大学生を一括した主成分分析を行った (Table 1)。固有値 1 以上を基準として 2 主成分が得られたが、「敗北者だと思ふことがよくある」以外の項目で第 1 主成分に .5 以上の主成分負荷量が得られたためこれを除いた 9 項目の合成得点を以て自尊感情得点とした。なお 9 項目での Cronbach の α 係数は .811 であった。

Table 1 自尊感情尺度の主成分負荷量

項目	I	II
自分に自信がある	.744	.220
いろいろな良い素質をもっている	.731	.365
少なくとも人並みには価値のある人間である	.708	.305
だいたいにおいて自分に満足している	.671	.021
何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ	-.670	.483
自分が全くだめな人間だと思ふことがよくある	-.641	.570
自分には自慢できるところがあまりない	-.636	.022
物事を人並みにはうまくやれる	.590	.332
自分に対して肯定的である	.553	.184
敗北者だと思ふことがよくある	-.367	.695

2. 回答者の分類

友人関係尺度の項目間のコサインに基づく平均連結法によるクラスタ分析を行い回答者を分類した。その結果、距離係数 .17 で 3 クラスタが得られた (Figure 1)。各クラスタの所属人数と投入変数の標準得点の平均値を Table 2 に示す。

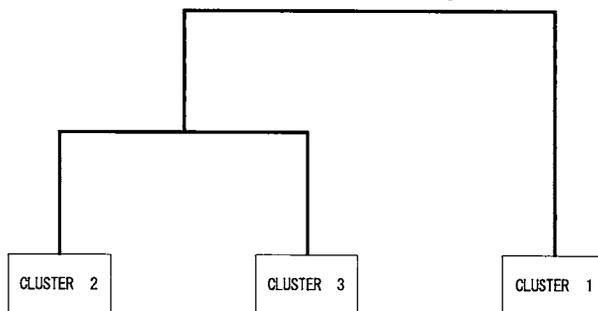


Figure 1 クラスタ凝集過程のデンドログラム

第 1 クラスタは快活的關係が平均値 (0) 付近で他の得点は平均以上の値を取ることから、現代的友人關係の内でも、關係を遠ざける指向性が働いている群と考えられる。第 2 クラスタは自己閉鎖が平均値付近であるもののすべての標準得点が負の値を示し、現代的友人關係を取らず、従来の青年觀に合致する内面的な關係を指向する群といえる。第 3 クラスタは快活的關係が高く、傷つけることの回避が平均的、自己閉鎖および傷つけられることの回避が平均値を下回る。このことから、本群は現代的友人關係のうちでも、円滑な關係を指向する群といえよう。各クラスタでの学校段階ごとの人数比について ANOVA コー

ディングによる対数線形分析(松田,1988)により人数比の検定を行った。観測度数および標準化推定値を Table 3 に示す。ここに見られるように、中学では第1および第2クラスタでの人数が有意に多く、第3クラスタの所属人数が有意に少なかった。また、大学では第2クラスタが少なく第3クラスタが多かった。このことから、年代が上がるにつれて、表面的に円滑な関係を求める傾向を持つ青年が増えること、一方で内面的関係を指向する青年が減少していくことが示唆された。

Table 2 各クラスタでの友人関係尺度の平均標準得点と標準偏差 () 内

下位尺度\クラスタ	1 (n=315)	2 (n=183)	3 (n=246)
自己閉鎖	.673 (.807)	-.003(.695)	-.852(.737)
傷つけられることの回避	.544 (.872)	-.358(.876)	-.464(.874)
傷つけることの回避	.443 (.879)	-.905(.835)	.108(.780)
快活的関係	.017 (.996)	-.560(.948)	.435(.791)

Table 3 各クラスタの学校段階ごとの所属人数と標準化推定値 () 内

学校段階\クラスタ	1	2	3
中学	107(.150*)	66(.222*)	47(-.372*)
高校	113(-.075)	70(.001)	97(.074)
大学	95(-.075)	47(-.223*)	102(.298*)

*:p<.05

註 推定値が有意に正の値をとるものは、相対的に大きな度数を持つことを示し、有意に負の値を取るものは度数が小さいとみなしうる

3.各クラスタでの平均値

各学校段階およびクラスタごとでの自尊感情および社会的スキル得点について平均値と標準偏差を Table 4 に示す。学校段階 (3) × クラスタ (3) の二元配置分散分析を行った結果、自尊感情については交互作用で $F(4,723)=3.073(p<.05)$ で有意となり、多重比較 (Bonferroni 法) の結果、高校で第2<第1<第3クラスタの順で得点が高かった。社会的スキルについてはクラスタの主効果で $F(2,709)=18.699$ 、学校段階間の主効果で $F(2,709)=10.759$ と、いずれも $p<.01$ で有意な差がみられた。多重比較 (Tukey 法) の結果、第2クラスタが他のクラスタより低く、大学生が他の年代より低かった。

大学生のみに実施した尺度項目についての平均値と標準偏差を Table 5 に示す。クラスタ間での一元配置分散分析を行い Tukey 法による多重比較を行った。その結果、NPI の注目・賞賛欲求下位尺度では第1クラスタが第2クラスタより高い傾向が見られ、他者評価過敏性および自己意識尺度で第1、第3クラスタが第2クラスタより有意に高かった。また BSI では第1クラスタが他の群よりも高かった。現代青年項目では、積極性下位尺度で第3クラスタが他の群よりも有意に高かったが他の下位尺度では有意な差は見られなかった。

Table 4 自尊感情および社会的スキルの合成得点の平均値とSDおよびその比較

クラス	上段：平均値 (標準偏差), 下段：人数			多重比較
	1	2	3	
自尊感情				
中学	22.663 (3.625)	21.344 (3.648)	21.543 (4.108)	交互作用: 中<高
	104	64	46	
高校	22.882 (3.516)	21.397 (3.172)	23.104(3.818)	交互作用
	110	68	96	2<1<3
大学	21.811(3.190)	22.277(2.551)	22.990(3.346)	
	95	47	102	
社会的スキル				
中学	47.337(7.506)	42.645(7.147)	48.911(6.112)	
	104	62	45	
高校	46.664(7.124)	43.896(5.932)	47.957(6.823)	クラスタの主効果
	107	67	92	F(2,709)=18.699**
大学	43.366(8.077)	42.109(6.694)	45.010(6.939)	2<1<3
	93	46	102	
	学校段階の主効果 F(2,709)=10.759 大<中高			

**: $p<.01$,*: $p<.05$

Table 5 大学生のみに実施した尺度項目の平均と標準偏差

クラス	上段：平均値 (標準偏差), 下段：人数			多重比較
	1	2	3	
自己愛人格 (NPI)				
優越感・有能感	29.250(6.085)	30.255(5.550)	30.676(5.892)	F(2,238)=1.448
	92	47	102	
注目・賞賛欲求	21.463(4.479)	19.872(3.675)	21.208(3.672)	F(2,240)=2.612 ⁺
	95	47	101	2 3 < 3 1
自己主張性	21.215(3.773)	22.222(3.759)	22.686(4.224)	F(2,237)=3.408 [*]
	93	45	102	
他者評価過敏	22.755(4.170)	20.391(3.166)	22.265(4.277)	F(2,239)=5.414 [*]
	94	46	102	2 < 3 1
境界性人格(BSI)	35.064(8.044)	31.826(6.819)	29.402(7.310)	F(2,239)=13.902**
	94	46	102	3 2 < 1
現代青年項目				
積極性	34.098(5.912)	35.362(5.708)	37.683(5.880)	F(2,237)=9.220**
	92	47	101	1 2 < 3
軽薄性	20.632(2.787)	21.043(3.050)	20.402(2.983)	F(2,241)=.776
	95	47	102	
親依存性	12.821(3.155)	12.957(2.859)	12.990(2.980)	F(2,241)=.082
	95	47	102	
自己意識特性				
公的自己意識	34.946(5.650)	28.979(6.052)	33.676(5.368)	F(2,239)=18.144**
	93	47	102	2<3<1
私的自己意識	31.537(4.445)	27.191(5.527)	30.525(5.190)	F(2,240)=12.178**
	95	47	101	2<3<1

**: $p<.01$,*: $p<.05$,+: $P<.1$

3 現実、理想、親友像の関係

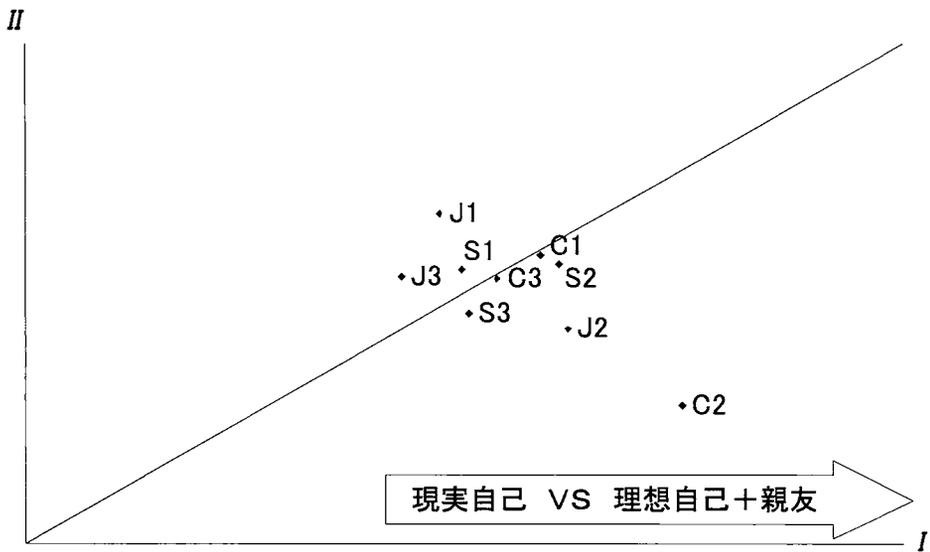
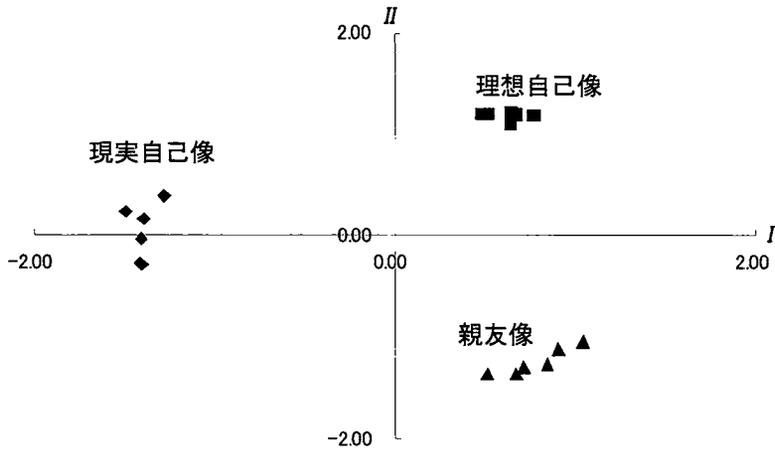
次に、各クラスタにおける現実・理想・親友各像間の認知された類似性を検討するために、自他概念について側面ごとに、現実自己、理想自己、親友各像の関係についての学校年代ごとでの各クラスタでの布置を柴山(1994)を参考に個人差多次元尺度法(INDSICAL)によって解析した。各側面別個に、項目×3対象間の相関行列を求め、これを $\sigma = \sqrt{1-r^2}$ によって非類似性の行列に変換し入力データとした。S-STRESS 値の減少の程度をもとにそれぞれ第2軸まで抽出した結果、各側面とも現実自己像、理想自己像、親友像がほぼ別々にまとまって布置されていた。本研究で用いた側面別自他概念の項目は概ね肯定的な内容の項目から成っており、岡田(1995)において、肯定的項目で各像が別個に認知されていたこととも合致する。各群共通の空間に項目を布置したものとクラスタごとの重み付け係数を Figure2～5 に示す。

社会的側面では、第1象限に理想自己像、第2、第3象限に現実自己像、第4象限に親友像が布置され、第I軸が[現実自己像]対[理想自己像・親友像]を区別する軸と考えられた(Figure 2)。重み付け係数より、中学の第2クラスタ、高校の第2、第3クラスタ、大学の全クラスタで対角線よりも第I軸側に偏っており、この軸を強調した判断がなされており、特に大学の第2クラスタでこの傾向が顕著であった。

心理的側面では、第1象限に親友像、第2象限に理想自己像、第3象限に現実自己像が布置され、第I軸が[現実自己像・理想自己像]対[親友像]、第II軸が[理想自己像・親友像]対[現実自己像]を区別する軸と考えられた(Figure 3)。重み付け係数より、中学と大学の第2クラスタが相対的に第I軸への重み付けが高く、他のクラスタが第II軸への重み付けが高かった。

身体的側面では、第1象限に理想自己像、第2、第3象限の軸上に現実自己像、第4象限に親友像が布置され、第I軸が[現実自己像]対[理想自己・親友]を区別する軸、第II軸が[現実自己像・理想自己像]対[親友像]を区別する軸と考えられた(Figure 4)。重み付け係数より、中学の第3、高校の第3、大学の全クラスタが相対的に第I軸への重み付けが高く、他のクラスタが第II軸への重み付けが高かった。特に大学の第2クラスタで第I軸への重み付けが顕著であった。

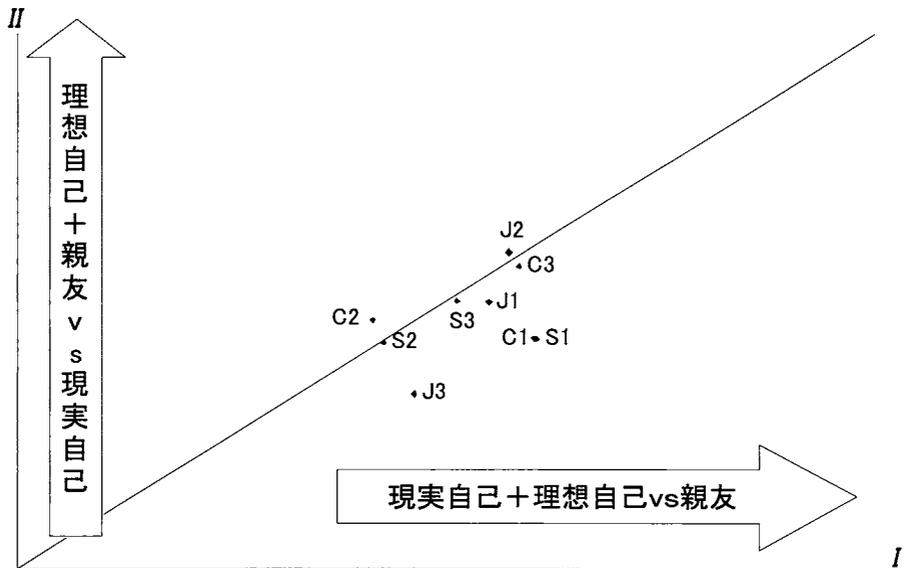
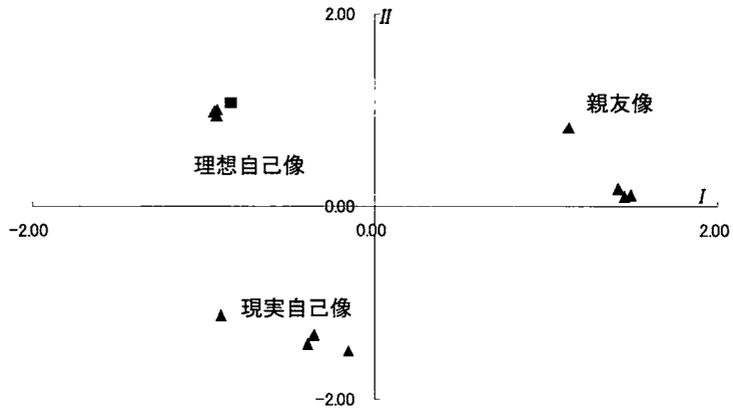
活動的側面では、第1、第4象限間に現実自己像、第2象限を中心に理想自己像、第3象限に親友像が布置され、第I軸が[理想自己像・親友像]対[現実自己像]を区別する軸と考えられた(Figure 5)。重み付け係数より、中学の第2、第3クラスタ、高校の第1クラスタ、大学の第2クラスタで第I軸への重み付けが相対的に高く、特に大学の第2クラスタでこの傾向は顕著であった。



J1: 中学第 1 クラスター J2: 中学第 2 クラスター J3: 中学第 3 クラスター
 S1: 高校第 1 クラスター S2: 高校第 2 クラスター S3: 高校第 3 クラスター
 C1: 大学第 1 クラスター C2: 大学第 2 クラスター C3: 大学第 3 クラスター

項目内容：人とうまくつきあえる 多くの人とつきあいがある 同年代の異性と楽しく話
 ができる 人に対して思いやりがある 他人にやさしい おおらかな人柄である

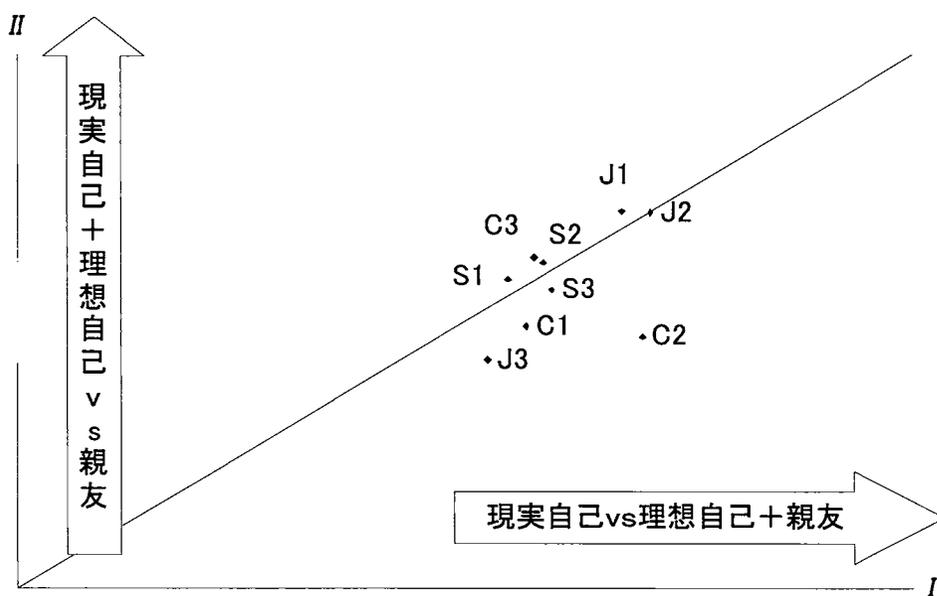
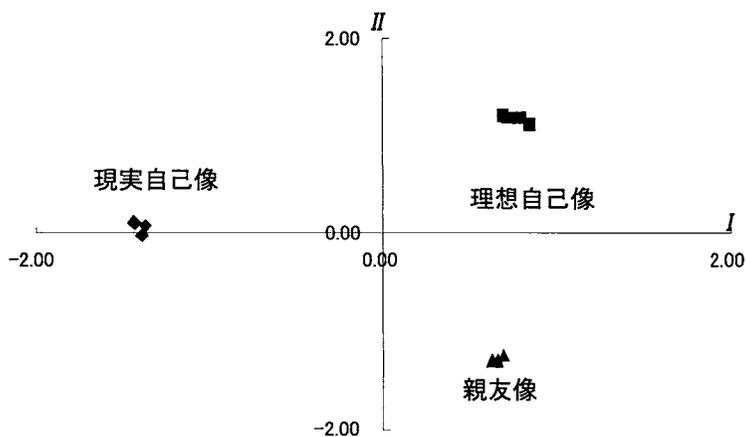
Figure 2 社会的側面での側面別像の布置および重み付けプロット



J1: 中学第 1 クラスター J2: 中学第 2 クラスター J3: 中学第 3 クラスター
 S1: 高校第 1 クラスター S2: 高校第 2 クラスター S3: 高校第 3 クラスター
 C1: 大学第 1 クラスター C2: 大学第 2 クラスター C3: 大学第 3 クラスター

項目内容: きちょうめんな性格 自分にきびしい 責任感がつよい もの知り

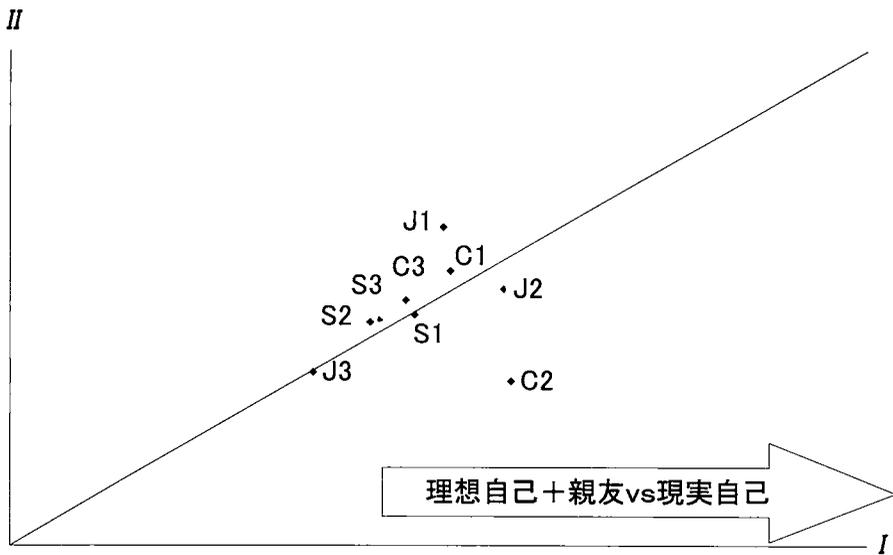
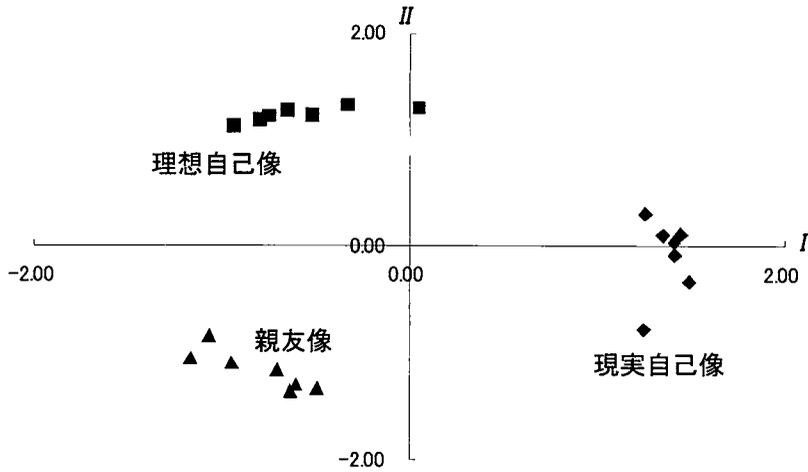
Figure 3 心理的側面での側面別像の布置および重み付けプロット



J1: 中学第1 クラスター J2: 中学第2 クラスター J3: 中学第3 クラスター
 S1: 高校第1 クラスター S2: 高校第2 クラスター S3: 高校第3 クラスター
 C1: 大学第1 クラスター C2: 大学第2 クラスター C3: 大学第3 クラスター

項目内容 : 外見がカッコいい 顔がよい 頭がよい 頭の回転がはやい

Figure 4 身体的側面の側面別像の布置および重み付けプロット



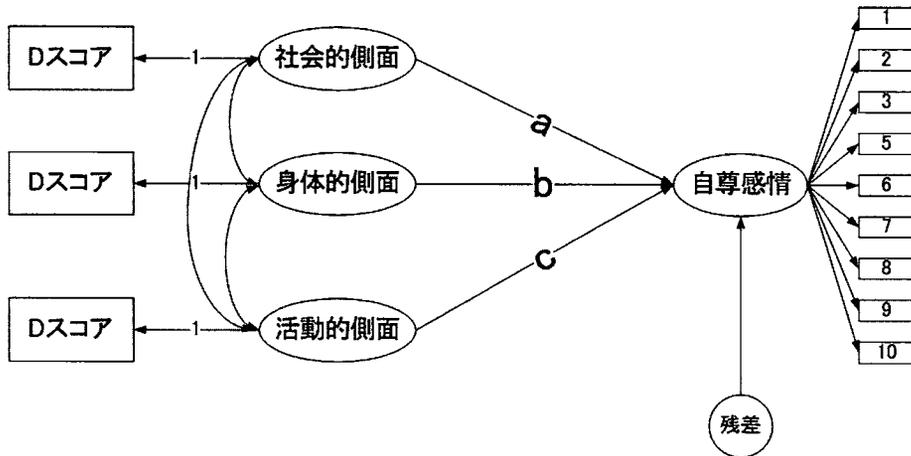
J1: 中学第 1 クラスタ J2: 中学第 2 クラスタ J3: 中学第 3 クラスタ
 S1: 高校第 1 クラスタ S2: 高校第 2 クラスタ S3: 高校第 3 クラスタ
 C1: 大学第 1 クラスタ C2: 大学第 2 クラスタ C3: 大学第 3 クラスタ

項目内容: 得意なスポーツがある 特技がある 熱中している趣味がある 体力がある
 スポーツマンタイプにみえる 運動神経がある

Figure 5 活動側面での側面別像の布置および重み付けプロット

4 自己像と自尊感情の関係

心理、社会、活動、身体の各自己の側面について現実自己像と理想自己像の間のユークリッド距離（Dスコア）を求め、このDスコアを独立変数、自尊感情を従属変数とするモデルを構成し、最尤法推定による共分散構造分析を行った。独立変数については各潜在変数に対応する観測変数（Dスコア）は1変数となるため、潜在変数から観測変数へのパス係数を1、観測変数の誤差分散を0に固定した。当初4側面すべてを投入した分析を行ったところ、心理的側面については、自尊感情との間に正のパス係数が得られた。これは、単純相関と符号が逆転しており多重共線性の疑いがあり、また論理的にも矛盾をきたすことから、心理的側面を分析から除外し Figure 6 に示すモデルで分析を行った。その結果、外生変数の共変動と、測定不変モデルで有意なパス同士、有意でないパス同士を等置制約した以下のモデルにおいてもっとも良好な適合度が得られた。すなわち、社会的側面では



標準化推定値

クラス	a	b	c	平均構造	切片
中-1	-.117*	-.346**	-.102*		
中-2	-.131*	-.106	-.105*		
中-3	-.135*	-.326**	-.117*	身	
				体: .771**	
高-1	-.252**	-.364**	-.097*		
高-2	-.114*	-.363**	-.105*		
高-3	-.211**	-.092	-.450**	身	自尊感情: .240**
				体: .597**	
大-1	-.130*	-.371**	-.109*		
大-2	-.241*	-.174	-.209*	身体: -.497*	
大-3	-.527**	-.111	-.102*	身体: .440*	

**: $p < .01$, *: $p < .05$

(観測変数の誤差変数は省略した)

Figure 6 適用モデルおよび最終的に採択されたモデルでの標準化推定値

中学の第1～第3、高校の第2、大学の第1、第2クラスを等置し、また高校第1、第3クラスを等置とし高校の第1、第3クラスよりも大学の第3クラスが高いとするモデルとした。活動的側面では中学の第2、高校の第3、大学の第2、第3クラスを等置し、また中学の第1、第3、高校の第1、第2、大学の第1クラスを等置した。身体的側面では高校の第3クラス以外を等置とした。このモデルについて平均構造について分析を行った結果、大学の第2クラスでの身体的側面の平均推定値が0未満、中学、高校、大学の第3クラスが0より大、高校の第3クラスの自尊感情の切片が0より高いとしたモデルでAIC=1571.897, BCC=1639.406, RMSEA=.036 PCLOSE=1でもっとも適合度が高かった(他の平均推定値および自尊感情の切片はすべて0に等置制約した)。

考 察

(1) 適応との関係

自尊感情については、高校生期において、第2クラスが低く、第3クラスが高い結果となった。高校生期には青年は自己批判的になり、自尊感情が低下することが従来から知られていた(加藤,1977;岡田・永井,1990)。内面的関係を取る本群でこうした傾向が見られたことは、本群が従来からみられる青年観に合致する群であることを示すものと言えよう。大学生期においては、自己閉鎖得点が高く内面的関係を避ける第1クラスでB S I得点が高いことは岡田(2007)とも共通していた。しかし快活的關係を中心とする第3クラスでN P Iの注目・賞賛欲求、他者評価過敏得点など自己愛の不適應な側面についてのみ高い得点となっていた。岡田(2007)では傷つけ合うことを恐れ快活的關係を求める群において、同様の傾向が見られたが、本研究における第3クラスは快活的關係のみが高く、傷つけることの回避および傷つけられることの回避の得点が高いのは第1クラスであることなど、クラスターの構成が異なっていた。一方で、またN P Iの注目・賞賛欲求および他者評価過敏の得点も第1クラスと第3クラスの間では有意差が見られなかった。これらのことから、本研究での第1、第3クラスは、岡田(2007)で見出された内面的関係を避ける群、傷つけ合うことを避け快活的關係を取る群が異なる形で混在したものと考えられる。社会的スキルについても第1、第3クラス間では有意差が見られなかった。これは、第1クラスにおいても、相手を傷つけないように配慮するという特徴が社会的スキルの高さとして現れたものと考えられる。

(2) 自己像・親友像および自尊感情の関係について

個人差多次元尺度法において、ある個体がある軸に対して重み付けが高いということは、その軸についてより強調した(軸を引き延ばす形で)判断がなされていると考えられる(前川,1988)。たとえば Figure 3 において、ある個体(群)で第I軸に対する重み付けが高いということは、各像の布置を示す図上で第I軸の正負の方向に軸が引き延ばされ、

重み付けがない個体に比べて、理想自己像と親友像の距離を現実自己像と理想自己像の距離よりも相対的に小さく判断していることになる。すなわち、こうした個体（群）においては理想自己像と親友像を相対的に類似したものとして判断されていると言える。言い換えれば、理想自己像と親友像を共通の枠組みでとらえ、現実自己像をこれと対峙するものとして比較対照していると考えられ、親友像に理想自己像を取り入れる過程が推測される。

中学生期では、対人関係を指向する群（第2，第3クラス）のみにおいて、親友像-理想自己像での類似判断が見られた。また、その中でも内面的関係を指向する第2クラスにおいて心理的側面での類似性が見られる一方、円滑な関係を指向する第3クラスでは身体的、活動的側面での類似性が見出された。このことは、仮説2にあるように、現代的友人関係を取る者ほど、より年少段階で注目される側面において親友像を取り入れようとしていることを示すものである。一方、第1クラスではいずれの側面でも親友像-理想自己像での類似性判断は見られなかった。関係を遠ざける群においては、中学生期では、そもそも友人との同一視過程が発生しないことが示唆される。現実-理想自己像の差異と自尊感情の関係についても、現代的友人関係をとる第1，第3クラスは年少者において中心的となる活動的側面によって自尊感情が規定されていた。一方内面的関係をとる第2クラスは、様々な側面について親友像との類似が見られる一方、これらは自己評価の基準としては機能してない。これは、本群が親友像を取り入れる段階にあり、理想自己像が自己を評価する基準として機能しない段階であるためと考えられる。

高校生期では、次のような結果であった。中学生期では見られなかった社会的側面における親友像-理想自己像の類似性が、関係を指向する第2，第3クラスにおいて見出された。一方で第1クラスでは活動的側面で親友像との類似性がわずかに見られた。関係を遠ざける指向性を持つ本群においても、高校生期において、年少者の中心的側面での親友像の取り入れ過程が開始されるものと考えられる。また心理的側面についてはいずれの群においても、現実自己像と理想自己像の類似性判断がなされていた。また、Figure2～5の重み付け係数のプロットに見られるように、心理的側面以外の高校生期のプロットはほぼ対角線近くに位置し、他の年代と比較して相対的には大きな偏りとは言えない。このことは心理的側面においては中学生期での親友像の取り入れ段階から、高校生期での現実自己像との比較段階に移行したことを示すものであろう。自尊感情との関係では、中学生期と異なり高校生期には様々な側面によって自尊感情が規定されていた。しかし、仮説2，3で想定したものは逆に現代的友人関係を取る第1，第3クラスにおいて社会的側面によって自尊感情が規定され、第2クラスはむしろ活動的側面によって自尊感情が規定されていた。次の大学生期に見られるように第3クラスでは親友像の取り入れと自己評価の基準としての理想自己の機能が平行するのに対して、第2クラスでは親友像の取り入れ過程においては、理想自己は自己評価基準として機能しない可能性が考えられる。し

かしこれらの群においても活動的側面（第1クラスタ）や身体的側面（第3クラスタ）でのパス係数が相対的には高く、社会的側面の規定力が高いとは必ずしも言えないだろう。

大学生期では、第1クラスタにおいて身体的側面で親友像-理想自己像の類似性判断がなされていた。関係を遠ざける群では、高校生期での活動的側面と同様、年少者に中心的な側面での親友像の取り入れがなされるものと考えられる。また第3クラスタにおいては高校生期と同様、身体的側面とともに、ごく僅かながら社会的側面でも親友像との類似性判断が行われていた。自尊感情との関係においては内面的関係の程度が低い第1クラスタで中学生期と同様、活動的側面が自尊感情を規定しており、部分的に仮説2に符合する結果となっている。一方、円滑な関係を指向する第3クラスタは、社会的側面において、親友像のモデル機能と、現実・理想自己の差による自己評価が平行して発生していた。すなわち自己にとって確固たる理想像が形成されるのではなく、その都度の親友像を理想自己に取り入れつつ自己評価基準として用いるといった過程が示唆される。一方、第2クラスタはどの側面でも自尊感情とのパスは.3未満であり、また等置制約前の段階ではいずれも有意なパスが見られなかった。同時にこの群ではすべての側面で親友像-理想自己像の類似性判断がなされていた。すなわち本群では、親友像のモデル機能のみが見られ、自己の評価基準としての理想自己は機能していないことになる。このことから、本群の自己意識特性が他の群より低いことについても説明されうる。自己意識特性は個人が自己覚醒状態になりやすい度合いを示す指標である。自己覚醒状態では、自己のもつ“適切さの基準 (standard)”，あるいは理想自己像との差が意識されやすくなると考えられている (Duval & Wicklund, 1972)。本群の青年は自己の適切さの基準である理想自己像が未確立であるがために、逆に自己覚醒も生じにくいことが考えられる。一方、下村・堀 (2004)は、大学生の就職活動における情報収集において、友人から得られる情報はもっぱら自分に関する個人的情報であり、就職活動の結果には直接の影響を及ぼさないことを見出している。また山浦(2006)は、大学生の就職活動における総合満足度は、友人などの身内との主体的な関わりからは影響を受けないことを見出している。本研究においても第2クラスタは現代青年項目の「積極性」得点が低く、必ずしも社会との積極的な関わりを指向していないことが示されていた。以上のことから、大学生期で内面的関係のみを指向することは、必ずしも発達的に成熟した状態とは言えず、就職などに代表されるより広い社会に適応していく課題には適合しない可能性が示唆される。また年代ごとのクラスタ構成人数比の検定 (Table3) では、年代が高いほど第2クラスタの人数が少ない傾向が見られた。このことも、青年期後期にかけて内面的友人関係のみに依拠する状態から脱していくことが発達の方向性として示されていると考えることもできよう。

以上のように自己像と親友像、自尊感情のあり方および友人関係様式には発達の違いが見られることが明らかとなった。しかしながら、本研究は横断研究であり、個人が発達

的にどのクラスタに移行するかといった発達の変容については今後の課題として残る。

引用文献

- Conte, H., Plutchik, R., Karasu, T., & Jerrett, I. 1980 A self report borderline scale: Discriminative validity and preliminary norms. *Journal of nervous and mental disease*, **168**, 428-435.
- Damon, W., & Hart, D. 1982 The development of self-understanding from infancy through adolescence. *Child development*, **53**, 841-864.
- Duval, S., & Wicklund, R.A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- Fenigstein, A., Sceier, M., Buss, H. Public and private self-consciousness : Assessment and theory. *Journal of consulting and clinical psychology*, **43**, 522-527.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ 14 日本心理学会
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 栗原彬 1996 やさしさの存在証明－若者と制度のインターフェイス－増補新版 新曜社
- Lapan, R., & Patton, M.J. 1986 Self-psychology and the adolescent process: measures of pseudoautonomy and peer-group dependence. *Journal of counseling psychology*, **33**, 136-142.
- 町沢静夫 1989 ボーダーライン・スケールの日本人への適用：日本における境界人格障害の診断妥当性の検討 精神科治療学, **4**, 889-899.
- 前川眞一 1988 多次元尺度法 渡部洋編著 心理・教育のための多変量解析法入門：基礎編 福村出版 pp.180-193.
- 松井豊 1990 友人関係の機能「青年期における友人関係」 斎藤耕二・菊池章夫編著 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 pp.283-296.
- 松田紀之 1988 質的情報の多変量解析 朝倉書店
- 西平直喜 1973 青年心理学.塚田毅 (シリーズ編) 現代心理学叢書 7 共立出版
- 西平直喜 1990 成人になること: 生育史心理学から 東京大学出版会
- 岡田努・永井徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関係 心理学研究, **60**, 386-389.
- 岡田努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, **35**, 116-121.
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 岡田努 1999a 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, **9**, 29-39.
- 岡田努 1999b 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, **47**, 432-439.
- 岡田努 2002a 現代大学生の「ふれ合い恐怖の心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, **10**, 69-84.
- 岡田努 2002b 友人関係の現代的特徴と適応感および自己像・友人像の関連についての発達的研究 金

- 沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇, **22**, 1-38.
- 岡田努 2006 調査法 海保博之(編集主査)心理学総合事典 朝倉書店 pp.36-42.
- 岡田努 2007 大学生における友人関係の種類と、適応および自己の諸側面の発達に関連について パーソナリティ研究, **15**, 135-148.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- Raskin, R., & Hall, C. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological reports*, **45**, 590.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls, & A. G. Greenwalt (Ed.), *Psychological perspectives on the self*. vol.3(pp.107-136). Hillsdale, NJ.: Lawrence Erlbaum Associates.
- 佐久間(保崎)路子・遠藤利彦・無藤隆 2000 幼児期・児童期における自己理解の発達：内容的側面と評価的側面に着目して 発達心理学研究, **11**, 176-187.
- 千石保 1991 "まじめ"の崩壊:平成日本の若者たち サイマル出版会
- 柴山直 1994 多次元尺度法の基礎概念と適用例 *Niigata Educational Psychologist*, **11**, 5-12.
- 下村英雄・堀洋元 2004 大学生の就職活動における情報探索行動：情報源の影響に関する検討 社会心理学研究, **20**, 93-105.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- 東京都生活文化局 1985 大都市青少年の人間関係に関する調査:対人関係の希薄化との関連から見た分析
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- 山浦一保 2006 大学生のかかわりあいのあり方は職業人生の始まりに何をもちたらすのか? 日常の対人関係で学び取ることによる効果. 日本心理学会第70回大会ワークショップ「青少年のキャリア意識形成と自己意識の発達促進に関する基礎研究」

注1 岡田(2006)において記された代替項目を用いた尺度項目を使用した。

付記

- 本研究の調査は1999年度立教大学研究奨励助成金「現代青年の対人希薄化と自己の発達に関する研究」を得て行われた研究の一部である。
- 本研究の統計処理にあたっては以下の統計パッケージソフトウェアを用いた。
S P S S 14 for windows, AMOS5(いずれもエス・ピー・エス・エス社)